

大特集「プログラミング言語の最近の動向」 の編集にあたって

徳田雄洋† 川合慧†† 魚田勝臣†††

小誌「情報処理」では、1979年3月号において、文献紹介特集として“プログラミング言語の最近の動向”を取り上げ、幸いにも読者の好評を得た。今回は、約11カ月の準備期間の下に、大特集“プログラミング言語の最近の動向”を刊行することとなった。

今日のプログラミング言語の中から、メーカ、ユーザ、研究所、大学等の各読者にとって重要と思われる言語または言語分野を31種選定し、それぞれの歴史的経過、最近の動き、参考文献を4ページ程度にまとめ、プログラミング言語の世界に対する展望と具体的な文献情報を提供することを目標とする。

本大特集の基本的編集方針は次の通りである。

(1) 対象とするプログラミング言語は、なるべく広義のプログラミング言語とし、プログラミング言語に対する多様な考え方の存在を提示する。

(2) 取り上げる項目の厳密な体系性は追求せず、むしろ広範囲の読者にとって興味深いと考えられる項目を積極的に採用する。

(3) 各項目の記述に対しては、少なくとも4名の査読者を配して内容の正確を期すが、各執筆者の自由な個人的見解の表明は、なるべくそのままを尊重する。

(4) 同一のプログラミング言語の記述が2箇所以上の項目に出現することを許容する。ただし、この場

合はどこか1箇所のみを主たる記述とし、ほかはすべて従たる記述とする。また、大特集全体に全体的解説2篇と言語名索引を付ける。

(5) 研究所や大学の実験的言語中心とならぬよう留意し、産業界の動向をなるべく反映させる。また分野によっては、アンケート調査を行って現状の把握に努める。

通常のハンドブック等の準備期間に比べると、11カ月という短い準備期間であったため、編集作業の各段階で非常に多数の方々のご協力を仰ぐこととなった。企画と項目選定の段階では、編集委員会のメンバーの方々に何度も熱心なご討議を頂いた。内容調整と執筆の段階では、各執筆者の全面のご協力を頂いた。そして査読の段階では、査読者・執筆者・編集委員会の3者で、時間的制約や経済的制約の許す範囲内で、内容に関する最終調整を行った。また印刷の段階では、大特集用シンボルマークの作成に、水谷理恵氏のご協力を頂いた。もとより本大特集の企画の成否は、編集担当幹事の責任であるが、編集作業の各段階で、多忙中にもかかわらず快くご協力頂いた上記の方々に深く感謝の意を表する次第である。

本大特集が、情報処理学会の会員諸氏に多少とも役立つ特集号となるならば、大特集の編集作業に学会事務局とともに11カ月間携わってきた者として、この上ない喜びである。

(昭和56年4月2日)

† 東京工業大学理学部情報科学科

†† 東京大学理学部情報科学科

††† 三菱電機(株)オフィス・コンピュータ部

